

多職種協働による在宅医療の実現

「全国在宅療養支援診療所連協会発足式&記念シンポジウム」開催

3月29日(土)、「全国在宅療養支援診療所連協会発足式&記念シンポジウム」が東京ステーションコンファレンス(東京都千代田区)にて開催された。

昨年、「看取りまで行なえる在宅医療」を推進するために設立された在宅医療推進会議。この会議は5つの作業部会をもつが、そのなかの1つ「在宅療養支援診療所・訪問看護ステーション等の能力強化方策に関する部会」で昨年アンケート調査が実施された。その結果も踏まえ、設立されたのが在宅療養支援診療所を全国規模でつなぐ本連協会である。

「在宅医療推進の要になるのが在宅療養支援診療所。ここをどう活性化するかが事業の成否を担う」(大島伸一(国立長寿医療センター総長)氏)、「国の組織に連絡会がつくられるのは地域でコツコツやっている身としては天井の穴から青空がのぞいている思いがする」(黒岩卓夫(在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク会長)氏)など、連絡会への期待が次々と語られるなか、発起人代表である太田秀樹(おやま城北クリニック院長)氏が連絡会の説明を行なった。

連絡会の活動内容は在宅療養支援診療所で働く医師の連携・交流活動のほか、歯科診療所や保険薬局など他の職能団体との連携・交流活動、在宅医療を推進するための情報提供や相談活動、地域ケアネットワーク



の構築活動など多岐に及ぶ。本連絡会の活動を通して各在宅療養支援診療所の機能を強化するとともに、多職種協働による在宅医療を実現し、在宅医療の普及・推進を目指す。

続いて記念シンポジウム「日本の在宅医療 夢の未来」が和田忠志(あおぞら診療所院長)氏を座長として行なわれた。蘆野吉和(日本ホスピス・在宅ケア研究会理事)氏が在宅での緩和ケア提供体制に関して発表すれば、地域で在宅医療をどのように展開させてきたかについて太田秀樹氏が、そして黒岩卓夫氏、鈴木央(鈴木内科医院副院長)氏と発言が続いた。その後、田城孝雄(順天堂大学医学部准教授)氏の在宅療養支援診療所の分類発表を挟み、討論に移った。介護職の参加、看取り数による診療所機能の評価の危険性、歯科など連携する多職種へのニーズをどう引き出すかなどについて議論され、最後に川島孝一郎(仙台往診クリニック院長)氏が未来の在宅医療のグランドデザインを解説して終了を迎えた。式全体を通して伝わってくる熱心な姿勢は今後の発展を期待させるものであった。